

平成25年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	学校法人エスコラピオス学園 海星中学・高等学校	氏名	小林 一憲
-----	-------------------------	----	-------

1. 印象に残る写真2点

●「天使の頬笑み」



テテクワシココ農園の外に住む少女。突然訪問した我々に警戒し、なかなか笑顔を見せてもらえなかったが、「将来、べっぴんさんなるで！」の言葉で、ようやく見せてくれたこの表情。将来の Ms.GHANA に出逢った！

●「日本とガーナを繋ぐ道路改修」



日本の無償資金協力である国道8号線改修計画プロジェクト。ガーナでは、舗装されていても穴ぼこがそこかしこに。生活の中で道は最も重要である。日本とガーナの良好な関係、国旗が共に並ぶ姿からそれが伝わる。

2. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

インターネットで検索すれば様々な情報が入手可能な今日、しかしそれは所詮他人の目というフィルターを通じたものであり、やはり自分の目や足で得たものに勝るものではありません。実際、研修を重ねるうちに新しくわかったことや改めてわかったこと、トイレや現地の方々のファッション、そして食事など「教材収集チームPure」として帯びていた指令がたくさんありました。自分の目で、耳で、足で、全身でガーナを感じ、吸収することを中心に現地での学びを心がけました。その中で、マナビノオトの存在は非常に大きかったと思います。疲れてメモなどが億劫になりがちな性格のため、いつも義務感で記入していたものの、帰国して読み返した今になって、その存在に感謝しています。授業の実践としては、どの事項を授業で取り上げるにしてもガー

ナと日本の間だけではなく、他にも中国やヨーロッパなど様々な国が重層的、複層的に関わっています。何を伝えるのか。そのために自分自身もこれから学びをさらに発展させていく必要性を感じています。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

見るもの全てが新鮮だった私は、本音はガーナ人とコミュニケーションが取りたくて仕方がありませんでした。しかし英語が苦手なためにそれがなかなか出来ず、英語でガーナ人たちと談笑する先生方を羨望の眼差しで見えていましたが、ある日転機が訪れました。それは、シニア海外ボランティアの円子先生からチュイ語の挨拶を教えていただいた際の「せっかくだすからなるべく多くのガーナ人に話しかけてください。この言葉で必ず彼らは笑顔になります。」という言葉でした。それからは「マーハ（こんにちは）」と「メダワシ（ありがとう）」を駆使し、「1日50メダワシ」を目標にガーナ人に接していきました。身振り手振りでも十分コミュニケーションは可能でした。おかげで、多くのガーニアンスマイルに出会いました。「何故その言葉を知っているんだ」とも言いたげに握手を求めてくれました。彼らも私たちに興味津津。ホテルのポーターでもそれは同じ。繋がる心は万国共通です。心残りは、自分で英語が話せたら、その続きが話せたのですが…。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

この研修に参加するまでは、私自身もいわゆる世間一般的なアフリカへのイメージを持っていました。しかし、実際に「ガーナ」に接することにより、それは大きく変わりました。「百聞は一見に如かず」という先人の言葉通り、実際に足を運んで初めてわかることばかりでした。挨拶をすると気さくに応じてくれるガーナ人（日本人よりもとても話しやすかったです。それは我々が外国人だったからかもしれませんが…）。自分の国に誇りを持ち、今後の自分たちの向かう先を真剣に考えているガーナ人（生活水準の高い人たち。水準の低い人たちはそれ以前に生活に一生懸命。その点は日本人とも同じか。）。他にも様々ありますが、国民性の違いこそあれ、日本人もガーナ人も、結局は未来を見つめる目線の方向は同じなのだとことを改めて実感しました。肌の色や地理上の距離から異種の存在としての意識を持っていましたが、その隔たりは以前より格段に低くなりました。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

この研修で学んだことの一つに、「国際協力とは何か」があります。これまで国際協力といえば、「途上国への募金」がまず頭に浮かんでいました。確かに、経済的貧困から支援を待っている人たちがいるのは事実です。しかし、だからといってまず集金ありきで金を集め、それをどこかの団体に預けて「ハイ、おしまい」では何も意味がありません。結局は自己満足です。「国際協力」はまず相手が何を求めているのかをよく見極め、その上で必要なことを考えなくてはならないということを学び、これまでの考えが如何に浅薄であるかを認識しました。JICA 専門家やボランティアには任期があります。その間に「殖産」をし、支援した相手が自立することが重要です。姑息な手段では、所詮短期的なものに過ぎず、長期的には何の解決にも至りません。彼らの行っていることは、ガーナ人に寄り添うこと。まさにその通りです。一方的ではなく、共に考えて明日を築いていくことが重要なのだと学ぶことができました。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、JICA 専門家の方々に共通していることが、自分たちの持っている専門性・スキルを生かし、それを必要としている人々や国のために尽力していることです。そしてそれは同時に自分自身の専門性や技術への追求ということにも繋がっているように感じました。また、皆さんの「やり甲斐」について、ガーナ人が「できる」ようになったときを挙げておられました。彼ら自身ができるようになることが重要で、そのために寄り添うこと。その点、我々教員と共通していると感じました。求めに対し即応するのは、日本の技術があれば簡単なことです。しかし、重要なのは、彼ら自身の「できる」が継続できるかです。「真の被益者（受益者）は誰か？」に焦点を置かれた活動は素晴らしいと感じました。だからこそ、今後はもっとこういった話や現実を知り、多くの人に共有してもらえる取り組みが必要かと考えます。教員は多くの人に接する仕事です。だからこそ、伝えるために教員研修の実施は今後も重要であると感じました。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

個人的に現地へ準備し、役に立ったアイテムはスルメ。ふと懐かしくなったときに噛んでいました。一方、持っていけばよかったと後悔したものは、爪切りでした。

充電は基本的にホテルなので可能でした。ただ、穴は日本のものとは違いますので、ご確認ください。

飛行機に乗る際、荷物量に関しては重量・個数など制限があります。そのため、スーツケースの容量を考えて土産や教材等、日本に持ち帰る分の買い物を最初は制限していましたが、最終的にはアクラモールで容量の大きい袋を購入してからは心おきなく買い漁ることができました。

注意事項としては、忘れ物や落し物です。恥ずかしながらうっかり置き忘れてしまう、気付かないうちに落とすなど、周りの人の指摘が無ければあわや…ということが何度かありましたので、パスポートや電子機器類などの貴重品の管理にはくれぐれもお気をつけて。

6. その他全般を通じての感想・意見など

まず初めに、無事に帰国できたのも、実りある現地研修だったのも、久世さんや各務さんはじめ共に行動した仲間の先生方のおかげなくしては不可能でした。外国経験 2 カ国目という海外初心者な私の言語を助けていただいたり、ミスばかりの私を優しく諭していただいたり、いろいろな興味深い話を聴かせていただいたり、楽しく過ごさせていただきました。また、NIED・国際理解教育センターや JICA 中部のスタッフさん、現地で対応して下さった稲村所長はじめ JICA 職員の方々、歓迎して下さった現地の全ての方々のおかげもあります。さらに、私を送り出してくれた学校や家族にもとても感謝しています。関係する皆様には衷心より御礼申し上げます。

さて、帰国後「どうだった？」と多くの人から聞かれて、最初に必ず応えるのが「行ってよかった！」の一言でした。そしてその後にガーナの風土、ガーナ人の印象、気候、日程の概要などを写真や動画を交えて説明しましたが、どの人、どの生徒たちも興味津々に話を聞いていただきました。

それら話したいことがたくさんあるのも、緻密に計画されたスケジュールのおかげで吸収できたことが大きいです。現地で活躍する JICA 専門家、ボランティア、そして JICA の職員さんたちとの交流がその最たるもの。

旅行とは違う反面、個人やツアーの旅行で触れることのなかった人々やプロジェクトを知ることができ、学ぶことが多かったです。交流を通して皆さんがどのような意識でそれぞれの仕事に対しておられるかも聞いて、とても印象に残っています。しかし、支援・開発を行っている国が最終的にどこへ向かうことを目的としているのかを聞きそびれてしまったのは残念でした。プロジェクトの定着は目標であり、希望であるとは思いますが、果たしてどこへ向かっていくのでしょうか。それを考えるのも、これからを担う私たちの世代の使命かもしれません。今後も多くの教員の方々に参加されることを臨むとともに、このような企画の存在自体の PR の一端を、我々もある程度は担っていかなくてはならないでしょう。

以上